

第八話 新撰組始末記

旗にシンボルの『誠』の字をかがげ、剣一筋に生きようとした新撰組の隊士たちは、官軍の近代兵器の前に次々と倒れていきました。新撰組の壊滅後「甲陽鎮撫隊」として出直した隊長の近藤勇は官軍に捕らえられて打ち首。その首は京の三條大橋の河原に晒されました。



三條大橋付近の鴨川

一方、副隊長だった土方歳三も遠く函館の戦線にて討ち死にし、沖田総司は病死。剣豪三本柱の一人、永倉新派八だけは明治の新時代を迎えました。かつて池田屋で新撰組と斬りあったことのある浪士の一人が明治になっ

て、京の四條大橋の上でこの永倉とバッタリと出合ったそうです。暫く宿敵と睨み合った時、杖を持つ永倉の手はワナワナと震えていたといえます。かつての剣豪の面影は微塵もな

く、そこには一人の背のかがんだ老いぼれが、まるで許しを乞うように立っていたといいます。一時代を画した新撰組の隊士であっただけに哀れです。

その頃、無論竜馬はいなかったのですが、竜馬の死後お竜は永く生きました。何か国家の重大な事件が起こると、

「ああ、竜馬がいたらなあ」

と言うのが彼女の口癖であったと聞きます。

さて時代は、それから半世紀以上も飛んで、昭和の初め頃の第四小学校の講堂です。開校一〇〇年を誇る古い講堂の天井に掲げられている竜馬の肖像画をじっと見上げている一人の少年がいました。竜馬の生まれた空家で、竜馬に「はなたれ小僧」と言われたあの餓鬼です。竜馬と同じ上町に生まれた少年は、やがて成長して、竜馬とお竜を宇宙に送り出すと言う数奇な運命を辿ることとなるのですが、これから始まるは、少年の星と暮らした波瀾の半生記です。